

## 聖トマス・アキナス『神学大全』の聖書論

佐々木 徹

### 序

聖トマス・アキナスは『神学大全』<sup>(1)</sup>の始め「聖なる教え (sacra doctrina)」について述べる第1巻第1問第1項において、「哲学的諸研究以外に、もう一つの別の教えを所有することは必要(必然的)であるか」という問題を提示している<sup>(2)</sup>。聖トマスは新約聖書「テモテへの手紙 二」3章16節「神の霊的導きによってなった聖書全体が、教え、反駁し、叱咤し、正義へと訓育するために有益である (omnis scriptura divinitus inspirata utilis est ad docendum, ad arguendum, ad corripiendum, ad erudiendum ad iustitiam.)」を引用して、人間理性 (ratio humana) によって考案された哲学的諸研究の他に、神の霊的導きによってなった学問 (scientia) の存在することが有益である旨主張している<sup>(3)</sup>。人間はその何らかの目的 (finis) としての神に秩序づけられており、この神は、旧約聖書「イザヤ書」で、「神よ、汝が、汝を愛する者達に準備したものらを、汝以外に、いかなる眼も見てはいない (oculus non vidit, Deus, absque te, quae praeparasti diligentibus te.)」と述べられている通り、人間理性の理解 (comprehensio rationis) を超えている<sup>(4)</sup>。しかるに、自らの諸々の志向 (intentio)・行為 (actio) を目的へと秩序づけていなければならない人間には、この目的があらかじめもって知得されている (praecognitus) のでなければならない。故に、人間にはその救いのために、人間理性を超えることどもが、神的啓示によって知らしめられることが必要(必然的)だったのである<sup>(5)</sup>。人間理性によって神について探究可能なことどもに向かうためにも、人間が神的啓示によって訓育されることが必要(必然的)なのである。なぜなら、神についての真理が、理性のみによって探究されたなら、それは少数の者らによってだけしか探究されず、しかも長時間かけても多くの誤謬を交えてしか人間に到来しないし、しかもこの真理の知得にこそ、神の内なる人間の救い全体が依拠しているからである<sup>(6)</sup>。上記のごとく、聖トマスは聖書 (scriptura divinitus inspirata・神の霊的導きによってなる書) を聖なる教え (sacra doctrina・キリスト教神学) に含めて扱いもする<sup>(7)</sup>が、聖トマスにとって、聖書は既述のごとき、人間の救いのための聖なる教えの必然性とその根拠 (理由づけ) として直に与えられているものだったのである。即ち、教会が保有する聖書によって、聖なる教えの必然性が正当化され、その探究が可能とされていると言えよう。そしてこの聖書は、神の霊的導きによってなるものなのである<sup>(8)</sup>。教会において聖書が与えられているという、聖なる教え (キリスト教神学) の実定性 (Positivität) はこの実定性の外からの超越的な神の恩恵による介入と、この恩恵による信仰共同体の包摂という超実定性 (Transpositivität)<sup>(9)</sup>によって支えられ成立しているのである。まさにその故にまた、このような実定性のうちに聖なる教えは超実定性を迎え入れることになるのである。聖書と聖書を準備し釈義し解釈する教会の伝

承<sup>(10)</sup>そして聖なる教えは、自然を破壊せず、却ってこれを完成する神の恩恵<sup>(11)</sup>に支えられているのである。従って、聖なる教えは、聖書と聖書を釈義・解釈する教会という実定性の故にこそ、且つまたこの実定性の中でこそ、超実定的な探究対象に差し向うことになるのである。教会が提示する、人間理性を超える神によって啓示されたことどもは信仰によって受容されねばならない<sup>(12)</sup>。また、聖トマスの時代においては、「哲学」とは知られうるすべてのことを探究する多くの学的諸部門を擁し、それは形而上学においてその頂点に達するのであるが<sup>(13)</sup>、既述の如く人間は聖書が語る神へと秩序づけられ、その人生はこの神を目的とし、人間の究極的な救いはこの神の内にあるのであるから、聖なる教えは、「神と至福者達の学問」を自らの上位の学<sup>(14)</sup>としつつ、自然本性的理性の光をもって諸哲学が取り組む諸々の事柄と同じ事柄を、神啓示の光によって知得される事柄として論ずる。故に、聖なる教えとしての神学は、哲学の一部門である神学とは類的に区別される<sup>(15)</sup>。聖なる教えは、神をその主要な考察対象とし<sup>(16)</sup>、諸被造物についてはその根源にして目標としての神へと関係付けられている限りで考察する<sup>(17)</sup>ことをもって、哲学的諸探究を批判的に検討しつつ自らに接合し統合して、それらを人間の究極目的である神へと牽引する学として成立している。このような聖トマスの「聖なる教え」としてのキリスト教神学にあっては、聖書はその主要な基幹部をなし、そこに述べられる超実定的探究対象の故に、諸哲学、特に本稿第三章でみるように形而上学的探究が聖書的に理由づけられることにもなるのである。本稿では、特に『神学大全』第1巻第1問第9項、第10項で聖トマスが聖書に関して述べていることを考察し、聖トマスの神学（聖なる教え）における聖書釈義の基本を明確にしたい。

## 註

- (1) 本稿で使用する聖トマス・アキナスの『神学大全』(Summa theologiae) <以下略号ST>のテキストは、Marietti版、さらにはSancti Thomae Aquinatis Summa Theologiae, Biblioteca de Autores Christianos, Madrid.である。参照した翻訳は次のとおりである。Die Deutsche Thomas-Ausgabe, Summa theologica, übersetzt von Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und Österreichs, hrsg. vom Katholischen Akademikerverband, Verlag Anton Pustest, Salzburg・Leipzig; The Summa Theologica of St. Thomas Aquinas I-III, Literally Translated by Fathers of the English Dominican Province, Benziger Brothers, Inc.; 『トマス・アキナス』山田晶(責任編集), 中央公論社, 1980年。本稿の聖トマスの著作からの引用は、全て本稿の筆者による私訳であるが、いずれの翻訳からも学ぶところがあり感謝する。
- (2) ST.1,q.1,a.1.
- (3) ST.1,q.1,a.1,Sed Contra.  
現代の新約聖書研究においては、「テモテへの手紙 二」3章16節の「神の霊的導きによってなった聖書全体 (π ᾱ σ α γ ρ α φ ῆ θ ε ὁ π ν ε υ σ τ ο ς)」(Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, Deutsche Bibelgesellschaft, 1983, S.554.) が、旧約聖書全体だけでなく「テモテへの手紙 二」以前に書かれた新約聖書の諸文書を含む可能性のあることが示唆されている。Vgl. Lorenz Oberlinner, Der erste Timotheusbrief / Der zweite Timotheusbrief, Herders Theologischer Kommentar zum Neuen Testament, Ungekürzte Sonderausgabe, 2002, S. 147f. 聖トマス自身は、そこにカトリック教会の正典としての旧約・新約聖書全体を読み取り、聖トマスは「聖書」を示す際, “sacra Scriptura” と表記する (Cf. ST.1,q.1,a.9. et a.10.)。
- (4) ST.1,q.1,a.1,Respondeo. Cf. Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1984 <以下, Vulgataと略記>, Isaias Propheta, 64.4, p. 1161.
- (5) ST.1,q.1,a.1,Respondeo..

- (6) Ibid.
- (7) ST. 1,q.1,a.1,Sed Contra.
- (8) 聖書、即ち「神の霊的導きによってなった書 (scriptura divinitus inspirata)」やそれを基幹部として有する「聖なる教え」は、古代ギリシア発の諸学問、特に近代諸科学にはなじまない学的探究の一形態をいうものとも受け取られ得よう (拙論「聖トマス・アクィナス『神学大全』における五つの道」(『茨城キリスト教大学紀要』第49号所収) 98頁以下の註 (9) を参照)。しかし近代諸科学の多様な諸研究においても、その様々な機会や段階において、科学的に説明する必要のない、あるいは説明する必要があるが経験科学だけでは説明し難い直観や直感あるいは勘に導かれ助けられて活路が開かれることはよくあることであろう。そのような事の内に、キリスト教神学の研究は、神の恩恵の働きを感謝をもって観て取るわけである。それならば、その神学的起源が信仰されている聖書に、キリスト教神学が様々な形で忠実であるのは当然のことと言えよう。
- (9) 「超実定性 (Transpositivität)」なる語は本稿の筆者の造語であると言ってよいであろう。浅学の故か、本稿の筆者の私は、他のところでこの語に出会ったことはない。
- (10) 聖書と伝承の関係については、拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』(2013年、サンパウロ) 序章第 I 節参照。
- (11) ST.1,q.1,a.8,ad2.
- (12) ST.1,q.1,a.1,ad1.
- (13) Cf. Bernard McGinn, Thomas Aquinas's Summa theologiae, 2014, p. 53.
- (14) ST.1,q.1,a.2,Respondeo.
- (15) ST.1,q.1,a.1,ad2.
- (16) ST.1,q.1,a.7,Sed Contra.
- (17) ST.1,q.1,a.3,ad1.

## I 聖書の隠喩

聖トマスの聖書論を理解するにあたり、聖書における隠喩に関する聖トマスの議論を抑えておくことは極めて肝要のことであると考えられる。聖トマスは、アリストテレスの『詩学』に由来する隠喩をめぐる議論の知見を得ていたであろうが、聖トマスにとって聖書は隠喩の宝庫であったと言ってもよく、聖トマスにおいては、聖書における隠喩表現が神学的に意義づけられ、隠喩の基準とされていると考えられるのである<sup>(1)</sup>。即ち、聖トマスは、旧約聖書を解釈するミドラッシュ (midrash)、新約聖書のイエスの譬えなどに受け継がれているマッシュアル (mashal) のごときユダヤ教の釈義に、教会的キリスト教信仰の立場から、アリストテレスの詩学の隠喩論を接木したと考えられるのである<sup>(2)</sup>。もとより、新約聖書の福音書におけるイエスの譬え (parabola) を形成する諸々の名辞・語が、隠喩的な転用を被っている<sup>(3)</sup>。何故に隠喩なのかという理由を尋ねるならば、それは、聖書あるいは聖なる教えがその探究対象として、神とその業に差し向っているからであるということになる。この自覚とともに聖トマスは、聖書と形而上学をはじめとする哲学的諸学の連関を見定め、批判的に吟味し、それら哲学的諸学の内、聖なる教えに統合可能な諸局面は統合しようとするのである<sup>(4)</sup>。この統合はまた、聖書からの読み出し・読み取り (Exegese・釈義) の一環でもあり得る。

さて、アリストテレスは、『詩学』において隠喩 ( $\mu\epsilon\tau\alpha\phi\omicron\rho\acute{\alpha}$ ) を定義して、「隠喩とは、もともと別様に用いられていた名辞・語 ( $\delta\upsilon\omicron\mu\alpha$ ) の転用 ( $\epsilon\pi\iota\phi\omicron\rho\acute{\alpha}$ ・移し置く事) である」と述べている。それは (a) 類における語の種的陳述への転用、(b) 種における語の類的陳述への転用、(c) ある種における語の別の種的陳述への転用、さら

には、(d) アナログア (類比) による ( $\kappa \alpha \tau \grave{\alpha} \tau \acute{o} \acute{\alpha} \nu \acute{\alpha} \lambda \omicron \gamma \omicron \nu$ ) 転用である。即ち、(a) の類における語の種的陳述への転用の例としてアリストテレスは、船の停泊を、船が止まっていると言う場合を挙げている。(b) の種における語の類的陳述への転用とは、多くの良きことを、一万の良きことと言ったりする場合になされている事である。(c) の、ある種における語の別の種的陳述への転用とは、「青銅で魂 (命) を汲み取りつつ」と言ったり「丈夫な青銅の器で切り取りつつ」と言ったりする場合になされている事で、「汲み取る」も「切り取る」もそれらを包摂する類である「取り去る」の種と受け止められる。(d) のアナログアによる転用は、上記 (a), (b), (c) の全てを包摂する隠喩の本質的特質を示していると考えられる<sup>(5)</sup>。アリストテレスの隠喩の分類には、例えば、ある類における語の別の類的陳述への転用は示されておらず、恣意的な面とも言わざるを得ない。アリストテレスの哲学が哲学として自らの主張の普遍性を要求しうるものであるなら、現代の日本語での、ある類における語の別の類的陳述への転用の用例を示してもよいであろう。日本の野球では、塁上の走者の盗塁を、捕手が野手への送球によって阻止し走者をアウトにすることを「刺す」とか「殺す」とか言う場合がある。もともと根源的には、野球に己の存在をかけ、そこにいのちの充実を知る深い誠実さから生まれた隠喩であろう。塁上の走者をアウトにすることと、刺す、殺すということとの間に類比が見て取られているわけである。それで「野球で、走者をアウトにする」を種として包摂しそれを意味する類としての「刺す」を「殺す」という語をもって述べたり、「野球で、走者をアウトにする」を種として包摂しそれを意味する類としての「殺す」を「刺す」という語をもって述べたりしているのである。もとよりこの場合、類的となる語で表示されているのは、野球で走者をアウトにするという特殊な (種的な) 事柄である。隠喩を考える場合、アリストテレスのように語と語の関係を示すために、種や類といった区別をもちこむ必然性はなく、より包括的に、アリストテレスの意を汲みつつも、隠喩を《ある名辞あるいは語を、それが今まで表示していたもの (事柄) とは別のもの (事柄) を表示するのに転用する事》<sup>(6)</sup> とした方が、言語における隠喩表現の実際をより正確に、簡明直截に述べることになるのではあるまいか。それはともかく、アリストテレスは、二つ目のものが一つ目のものへ関係することと、四つ目のものが三つ目のものへ関係することとが相似に ( $\acute{o} \mu \omicron \acute{\iota} \omega \varsigma$ ) ある事によって成立する、ある関係と別の関係とのアナログア<sup>(7)</sup>、即ち比例性のアナログア (analogia proportionalitatis)<sup>(8)</sup> を指摘している。例えば、老年の人生への関係は、夕暮れの日への関係に似ており、そこに成立する比例性のアナログアにより、夕暮れを「一日の老年」と言ったり、老年のことを「人生の夕暮れ」と言ったりする隠喩が生まれるのである<sup>(9)</sup>。アリストテレスは、詩人における隠喩の天分の重要性を説き、「善き隠喩を形成することは、相似を觀照することである」と指摘している<sup>(10)</sup>。天分に関してはさておき、ともかくもこの詩人にまつわる指摘は、隠喩の本質的特質を考える上で重要であると思われる。

聖トマスは、『神学大全』第1巻第1問第9項「聖書は隠喩を用いなければならないか (Utrum sacra Scriptura debeat uti metaphoris)」において、三つの異論を挙げている。その一つ目は、聖なる教えとしての聖書が他の諸学問の中で最高位を占めており、様々な相似性 (similitudo) や像的表現 (repraesentatio) を通じて進みゆくことは、詩学のように

な最下位の学問に固有のことであり、このような諸相似性を使用することは、聖書にふさわしくないという主張である<sup>(11)</sup>。聖トマスはこの異論に対して、詩人は像的表現のために隠喩を使用し、そのような像的表現は本性的に人間にとって美的に楽しい(*delectabilis*)ものののであるが、聖なる教えとしての聖書はしかし、必然性と有用性のゆえに隠喩を使用するのである<sup>(12)</sup>としている。二つ目の異論は、聖書の教えが真理の表明に向けて秩序付けられているが故に、詩学が追究する相似性をもってすれば真理はかえって隠蔽されてしまうと主張する。神的なことどもを、物的・身体的諸事物との相似性のもとに伝えることは聖なる教えにふさわしくないというのである。三つ目の異論は、なんか被造物がより高貴であるほどに、より一層神的相似性へと接近すると主張する。そして被造物のあるものらが神に転用される場合は、より高貴な諸被造物から転用されねばならず、最下位の諸被造物からの転用はなされてはならないとし、しかし聖書では、このあてはならないことがしばしば起こると反論する。この異論は聖書を聖なる教えに含めることに反論する異論、あるいは聖書を基幹部に擁する聖なる教えそのものに反対する異論とも受け取られえ<sup>(13)</sup>。

確かに聖書では、非物的で霊的な存在者である神<sup>(14)</sup>に、神の御顔、神の御手といった<sup>(15)</sup>人間の身体部位を意味する語を転用する隠喩が用いられている。それだけではなく、聖書においては、神が自らを、通常は人間よりも下位であると思われる雌ライオン、雄豹、雌熊、雄ライオンにも喩え(させ)<sup>(16)</sup>、聖書に従えば、聖書の直喩的表現を隠喩に仕立てて「神はライオンである」という隠喩的表現を聖なる教えは形成することもできるくらいである<sup>(17)</sup>。以上の三つの異論に対する反対意見(*Sed Contra*)で聖トマスは、旧約聖書の「ホセア書」から次の言葉を引用する。

「わたし(神)は彼ら(預言者たち)に幻を多く与え、そして私は預言者たちの手の中で似せられ・模写された(相似的に表現せられた)。」(*Ego visionem multiplicavi eis, et in manibus prophetarum assimilatus sum.*)<sup>(18)</sup>

聖トマスによれば、なにものかを相似性のもとに(*sub similitudine*)伝達することが隠喩使用(*metahoricum*)である<sup>(19)</sup>。神について語り、神の業を証言して語る隠喩の使用は聖書にふさわしいことなのである。聖トマスの聖書論は、聖書における隠喩の考察をもって、創造主なる神と被造物とのより大きな非相似性(*dissimilitudo*)のもとに、双方の相似性(*similitudo*)を知ろうとする聖アンセルムスや第四ラテラノ公会議の正当性<sup>(20)</sup>を受け継ぎ、それを聖書によって確認することともなっている。すなわち、ライオンのごとき野獣を神に転用する隠喩<sup>(21)</sup>もまた、あるいはそれこそ聖なる教えとしての聖書にふさわしく、そこに聖書における物的・身体的被造物を表示する語の神への転用としての隠喩使用の本来的な必然性と有用性<sup>(22)</sup>があるのである。このような聖書的隠喩は、この地上の生において我々が神について所有する知得によりふさわしいのである。即ち、我々には、神については、神が何であるかということよりも、神が何でないかということの方がより一層明らかである。従って、神からより遠く離れている事物らの諸相似性こそが、我々が神について語ったり考えたりすることを神が超越しておられる事に関して、より真なる価値査定を我々になすのである<sup>(23)</sup>。神について語り、神の業を証言して語る聖書の言語では、もとの日常的な名辞あるいは語が、非日常的な意味の増幅と変容を被っている



場合が多いのである。こうして、神的なものは、それにふさわしくない人々にはより一層隠蔽される<sup>(24)</sup>。また、「ライオン」のような野獣を意味する語を神に転用した場合、すなわちより高貴な物的・身体的存在者を表示する語ではなく、より下位の物的・身体的存在者を表示する語を神の表示として用いる場合、それがもとの意味で言われているのではないことは明らかで、これにより人間の魂は誤謬からより一層解き放たれるのである<sup>(25)</sup>。創造主なる神と被造物である人間とのより大きな非相似性の自覚のもとに、双方の相似性が観て取られねばならないからである。より高貴な物的・身体的存在者の型 (figura・譬え) のもとに神的なものが叙述される場合 (即ち、より高貴な物的・身体的存在者を表示する語を神に転用する場合)、このことは疑わしくなりえる。より高貴な物的・身体的存在者からしか神についての知識を獲得できない人々においては、最大度に疑わしいのである<sup>(26)</sup>。聖トマスによれば、神は万物の本性に適切であることをもって、被造物に御摂理を執行する<sup>(27)</sup>。しかるに感覚可能な事物から、理性的に理解可能な事物に至ることが、人間に本性的である。なぜなら我々人間の全ての知得 (cognitio) は感覚から出発するからである<sup>(28)</sup>。このことは、聖書において、霊的なことども (spiritualia) が物的・身体的なものらを表示する言葉の転用による諸隠喩をもって伝えられていることと符合する<sup>(29)</sup>。聖トマスは、ディオニシウスの『天上位階論』から次のように引用する。

「諸々の聖なる覆いの多様性によって周囲を包まれているのでなければ、神的光線は我々を照らしだすことはできない。」 (*Impossibile est nobis aliter lucere divinum radium, nisi varietate sacrorum velaminum circumvelatum.*)<sup>(30)</sup>

神の啓示の光線は、周囲でそれを包む感覚的な型 (感覚的諸形体) によって破壊されるのではなく、却ってその真理 (veritas) に留まるのである<sup>(31)</sup>。それは啓示を差し向けられた諸々の精神が、感覚で確認しうる諸々の相似性に停滞することを許容せず、それら諸精神を理性的に理解可能なことどもの知徳へと引き上げるためである<sup>(32)</sup>。恩恵は、啓示を差し向けられた人間本性を破壊せず、却ってこれを完成するのであると言えよう。それはまた、啓示を差し向けられた人々によって、他の人々が啓示を巡る理性的に理解可能なことどもについて導かれるようになるためである<sup>(33)</sup>。この故に、聖書のある箇所では、よりはっきりと提示されているのであるという<sup>(34)</sup>。諸々の型 (諸々の具体的諸形体、物的・身体的諸事物) による隠蔽 (occultatio) は、真理の探究者らには有用であり、不信仰者らの侮蔑的嘲笑に対抗するのにも有用である<sup>(35)</sup>。

以上のごとく、物的・身体的事物を表示する名辞あるいは語を神に転用する聖書の隠喩は、聖書がまさに聖なる教えとして全ての人々に共通に提示されており、理解可能なことどもを自ら把握することに不向きな未熟粗野な人達も、聖書の述べることを把握するようにするものであることを示している<sup>(36)</sup>。聖トマスが聖書の隠喩による表現をことさらに取り挙げるのは、「私は、知恵ある人々にも知恵なき人々にも責任がある (*sapientibus et insipientibus debitor sum*)」と述べた聖パウロの衣鉢を継承しようとしたからであると言えよう<sup>(37)</sup>。それはまた、聖トマス自身の神学において、既述のごとく、創造主なる神と被造物とのより大きな非相似性のもとに、双方の相似性を知ろうとする聖アンセルムスや第四ラテラノ公会議の宣言の正当性を受け継ぐことにもなるのである。聖書が証する究極

的真理は、まさに隠喩形成を要求する真理である。そのような意味において、それは隠喩的真理である。なぜなら、人間となった御子なる神イエス・キリストこそ聖書全体の事柄上の中心であり、この中心的真理が旧約聖書・新約聖書のあらゆる記述や名辞あるいは語を自らに関係づけ、それらの様々な記述や名辞あるいは語が様々な度合いで自らに転用されることを強要し、それらの記述や名辞あるいは語を隠喩もしくは隠喩的表現として強固に意味づけ、そしてこの隠喩的意味を字義的に確定して保持することを方向付けるからである。こうして聖トマスにおいて、聖書における四様の意味が考察されることとなるのである。

## 註

- (1) ST.1,q.1,a.9.
- (2) Cf. Gilbert Dahan, Thomas Aquinas: Exegesis and Hermeneutics, in: Reading Sacred Scripture with Thomas Aquinas. Hermeneutical Tools, Theological Questions and New Perspectives, Brepols, 2015<以下略号SSTH>, pp. 45-70, pp. 62-64.; Gilbert Dahan, Lire la Bible au Moyen Âge, Droz, 2009, p. 39 sq. もとより、この接木ができるのは、連綿と継続するような接木の伝統があるからに他ならないであろう。既に旧約聖書を解釈するユダヤ教の伝統の内に、古代ギリシア発の解釈法の採用があり、それが新約聖書に、初代教会の信仰の文脈で受け継がれているのである。例えば、比喩的解釈法について、新約聖書「ガラテヤの信徒への手紙」4章24節を参照のこと (Nestle-Aland, Novum Testamentum Graece, op. cit., S. 499f. cf. Gilbert Dahan, Lire la Bible au Moyen Âge, op. cit., p.20 sq.). ユダヤ教においてもキリスト教においても、聖書は啓示の書もしくは啓示証言の書として信仰され尊重されるが故に、解釈法、釈義法の豊かな追及の伝統が生み出されたと言える。
- (3) 新約聖書「マタイによる福音書」13章など参照。Cf. Vulgata, Secundum Mattheum, p. 1544 sqq.
- (4) 従って、本稿第Ⅲ章で示されるように、聖書で述べられている神名が、形而上学的神証明を自らに統合する場合もあるし、アリストテレスの「世界の永遠性」の説との批判的・対決的な取り組みがなされる場合もある。この「世界の永遠性」との取り組みに関しては、次を参照。Jean-Pierre Torrell, O.P., Saint Thomas Aquinas, volume 2. Spiritual Master, translated by Robert Royal, The Catholic University of America Press, 2003, pp. 229-234.
- (5) Aristoteles, Poetik. Griechisch/Deutsch, übersetzt und herausgegeben von Manfred Fuhrmann, Bibliographisch ergänzte Ausgabe, Reclam<以下, Poetikと略記>, 1457b, S.66ff.
- (6) Cf. Franz Manthey, Die Sprachphilosophie des hl. Thomas von Aquin und ihre Anwendung auf Probleme der Theologie, Verlag Ferdinand Schöningh/Paderborn, 1937, reprint, S. 96ff.
- (7) Poetik, 1457b, S. 68f.
- (8) 比例性のアナロギアについては、前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第1章第IV節参照。
- (9) Poetik, 1457b, S.68f.
- (10) Poetik, 1459a, S.74ff.
- (11) ST.1,q.1,a.9.
- (12) ST.1,q.1,a.9,ad1.
- (13) 以上, ST.1,q.1,a.9.
- (14) Cf. ST.1,q.3,a.1.
- (15) 旧約聖書「詩編」31編16節, 17節参照。Cf. Vulgata, Psalmi iuxta Hebr. 30,16.17., p. 803.
- (16) 旧約聖書「ホセア書」13章7節以下参照。Cf. Vulgata, Osee Propheta, p.1383.
- (17) 旧約聖書「イザヤ書」31章4節参照。Cf. Vulgata, Isaias Propheta, p. 1127. 前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第1章第IV節参照。
- (18) ST.1,q.1,a.9,Sed Contra.
- (19) Ibid.
- (20) Cf. Denzinger-Schönmetzer, Enchiridion symbolorum definitionum et declarationum de

rebus fidei et morum, editio XXXVI, Herder, 806, p. 262. Cf. St. Anselmus Cantuariensis, Epistola de Incarnatione Verbi, XIV.(II. 33), rec. F. S. Schmitt. 前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第1章第1節参照。

- (21) ST.1,q.13,a.6,Respondeo.
- (22) ST.1,q.1,a.9,ad1.
- (23) ST.1,q.1,a.9,ad3.
- (24) Ibid.
- (25) Ibid.
- (26) Ibid.
- (27) ST.1,q.1,a.9,Respondeo.
- (28) Ibid.
- (29) Cf. Ibid.
- (30) ST.1,q.1,a.9,Respondeo.
- (31) ST.1,q.1,a.9,ad2.
- (32) Ibid.
- (33) Ibid.
- (34) Ibid.
- (35) Ibid.
- (36) ST.1,q.1,a.9,Respondeo.
- (37) Ibid.

## Ⅱ. 聖書における語義の複数性、あるいは四つの意味

聖トマスは、異論に反対しつつ、聖書のある一つの語が四つの意味を持ちうることを指摘せんとする。その四つの意味とは、歴史的还是は字義の意味 (sensus historicus vel litteralis)、比喩の意味 (sensus allegoricus)、転義的还是は道徳の意味 (sensus tropologicus sive moralis)、上昇の意味 (sensus anagogicus) である<sup>(1)</sup>。聖書の起動者 (auctor) は神であるが、神はその能力において (in potestate) 諸々の言葉 (voces) を諸々のある事柄を表示することに向けて適応させることができるだけでなく、諸々の事柄そのものを、それらとは別の他のある諸々の事柄の表示に適応させることができる。諸々の言葉を、諸々のある事柄を表示することに向けて適応させることは、人間にもなしえる<sup>(2)</sup>。全ての諸学問において、諸々の言葉は、その固有の意味を所有し表示するが、聖なる教えあるいは聖書に固有のことは、諸々の言葉によって表示された諸々の事柄 (res) が、他の何事か (他の事柄) をも表示する (significare) ということである<sup>(3)</sup>。諸々の言葉が諸々の事柄を表示する際の第一の筆頭表示 (prima significatio) は、第一の筆頭の意味に関連・適合する。この第一の筆頭の意味とは、歴史的还是は字義の意味なのである<sup>(4)</sup>。諸々の言葉によって表示された諸々の事柄が、さらにそれらとは別の諸々の他の事柄を表示する際、その表示の意味は霊の意味 (sensus spiritualis) と言われるのである<sup>(5)</sup>。聖トマスが示す上記四つの意味の内、比喩の意味、転義的还是は道徳の意味、上昇の意味の三つが霊の意味である。霊の意味は、字義の意味に基礎づけられ、それを前提としている<sup>(6)</sup>。諸々の言葉を諸々の事柄の表示に向けて適応させ歴史的・字義の意味を創出することは、既述のごとく人間にもできるわけであるから、聖書における歴史的・字義の意味の存在と、非被造的な恩恵なしには成就しえない聖書の語の霊の意味の創出との連関において、聖トマスは、「恩恵は自然を破壊せず、却ってこれを完成する」<sup>(7)</sup> という自らの神学的な恩恵の



主張を聖書論の考察においても一貫させていると言えよう。聖書の語や記述の霊的意味の諸連関が見出されるのは、聖書が神を証言し、神の恩恵の行為・出来事を語っているからに他ならず、この神の恩恵によってこそ霊的意味が存在せしめられているからである。この故に、旧約聖書・新約聖書の語は意味の隠喩的な増幅と変容を被っているわけであり、従って非日常の意味を獲得し、その記述は隠喩の意味表示をすることになるのである。しかも神の恩恵によってなった隠喩の意味は釈義の作業を通して字義的に確定され、人間の恣意に引きずられた読み込みから守られ、聖書の神の言葉としての正当性が確認されるのである。聖トマスの聖書釈義とは、神の恩恵によって既に存在している霊的意味の字義的に既に確認された意味を探り確認し、従ってまた、既に意味の隠喩的な増幅を被った語の隠喩の意味そのものを文脈に即して字義的に追認し確定する作業となるはずなのである。故に、聖書の語の意味の複数性は、決して同名意義 (aequivocatio) や別種の複数性を生み出すことなく、一つの言葉が多くの事柄を表示するといった事態を出来させるものではないし、諸々の言葉によって表示された諸々の事柄が、それらとは別の他の諸々の事柄の諸表示であり得るのであるから、そこから混乱が生じることはないというのである<sup>(8)</sup>。聖トマスは次のように述べている。

「こうして聖書においてはやはり、いかなる混乱も結果しない。なぜなら全ての意味は一つの意味、即ち字義の意味に基礎づけられており、アウグスティヌスがドナトゥス派のヴィンケンティウスに対決する書簡の中で言っているように、論証はこの字義の意味からのみ導出されえるのであって、比喻によって言われることどもからは導出されえないからである。しかしながら、このことによって聖書がなにか損失を被ることはない。なぜなら信仰に必然・不可欠のものは霊的意味のもとに包含されているのであるが、信仰に必然・不可欠のものは、聖書がそのどこかの箇所、必ずや字義の意味によって明瞭に伝達しているからである。(Et ita etiam nulla confusio sequitur in sacra Scriptura: cum omnes sensus fundentur super unum, scilicet litteralem; ex quo solo potest trahi argumentum, non autem ex his quae secundum allegoriam dicuntur, ut dicit Augustinus in epistola contra Vincentium Donatistam. Non tamen ex hoc aliquid deperit sacrae Scripturae: quia nihil sub spirituali sensu continetur fidei necessarium, quod Scriptura per litteralem sensum alicubi manifeste non tradat.)」<sup>(9)</sup>

聖書の語のあらゆる意味は、字義の意味という一つの意味に基礎づけられ、そこからのみ神学的論証が熟考される<sup>(10)</sup>。人間本性を破壊せず、却ってこれを完成する神の恩恵によって育まれる聖書の隠喩的言語形成とともに生まれる霊的意味が、既に確定した隠喩の意味として尊重され、従ってもとの語の転用によって生じた新たな隠喩の意味が字義的に不変のものとして尊重され、人間の恣意的読み込みや混乱した理解を拒絶するものであることが考えられているのである。聖書で、既にそのようなことがなされているのであって、聖書釈義に従事する教会の信仰者・神学者は、この聖書で既になされたことを自らの理解へともたらさなければならないのである。隠喩的言語を生み出させる神の恩恵の行為によって育まれ確定する聖書の語り・語の霊的意味そのままの意味を遵守し字義的に不変のものとし、自らが恣意的に霊的意味を創ってそれを聖書に読み入れないことが聖書釈義

において大切なのである。このような聖書釈義が、聖書に示される神の恩恵を真摯に受け止めることになるのである。例えば、聖トマスは聖書における譬えの意味 (*sensus parabolicus*) が字義の意味に包含されるとしている<sup>(11)</sup>。聖トマスによれば、もろもろの言葉の内、あるものは本来的に (*proprie*)、あるものは他のものの型として (*figurative*・譬えとして) 表示されるが、後者の場合、字義の意味は型 (*figura*・譬え) それ自体ではなく、譬えられたこと (*id quod est figuratum*・型どられたこと) であるという。即ち、聖書で「神の腕」と述べる際、神にこのような身体的部位のあることを示すのがその字義の意味ではなく、このような身体的部位によって表示されること、即ち神の活動力 (*virtus operativa*) が字義の意味なのである<sup>(12)</sup>。この故に聖書の字義の意味には決して誤りはないのであるという<sup>(13)</sup>。通常「神の腕」とは、聖トマスからすれば、語の転用・隠喩であるに相違ないであろうが、聖トマスはこのような聖書における譬えの意味、隠喩あるいは譬え (*parabola*)<sup>(14)</sup> で表現された意味内容を字義的に確定し安定させ、字義的に確定されたそれらの意味、意味内容を最大限に尊重しようとしている。あるいはまた既に示したように、聖トマスは、聖書において霊的意味のもとに包含されている信仰に必要・不可欠のものは、聖書の他の箇所で字義の意味によって明瞭に伝達されていると主張するわけである<sup>(15)</sup>。以上のように、聖トマスが聖書における字義の意味を重要視するのは、神の恩恵によって成立した聖書の意味世界を可能な限り、人間の恣意的な意味創出から防御しようとするものであり、聖トマスは素朴ではあるが、堅実で安定した聖書釈義を目指していたと言える。それはまた聖書における神の恩恵の業をありのままに受け止めようとすることでもあるのである。まさにまたこの故にこそ聖トマスにとって、「聖書は」、聖グレゴリウス (St. Gregorius) が言うように、「その自らの語りの方式そのものによって、すべての学問を超え出ている。なぜなら聖書は為された事 (出来事・*gestum*) を物語る際、その語りの同じ言説をもって秘義 (*mysterium*) を告げ知らせるからである。」<sup>(16)</sup> 聖書釈義をする信仰者・神学者は、教会を通して自らに与えられている聖書の実定性によって、超実定的な考察の次元へと促されるのである。この実定性と超実定性の境界線は、信仰者にとっても見極め難いのであるが、この境界線の振幅の内に感謝と願いの祈りの場があると言わねばならない。教会内の刷新運動や、教会とこの世の交流連関もこのような祈りと共になされるに相違なかろう。なお聖トマスは、聖アウグスティヌス (St. Augustinus) が『信の効用』 (*De utilitate credendi*)<sup>(4)</sup> において、旧約聖書における語の意味を、歴史 (*historia*)、原因 (*aetiologia*)、類比 (*analogia*)、比喩 (*allegoria*) に区別したことに言及しつつ、最後の比喩のみが聖トマスが述べた既述の三つの霊的意味に代用されるとしている。聖アウグスティヌスにおいては、歴史とは単に何事かが提示される場合、原因とはある事態の原因、例えば新約聖書「マタイによる福音書」19章8節において、主イエス・キリストが、モーセが何故、妻たちを離縁するという勝手を許容したのかということの原因 (理由) を示す場合、類比とは聖書のある一つの真理が他の真理に矛盾しない場合に存在する各々の意味のことを言う。これら歴史、原因、類比の三つは一つの字義の意味に所属するという。また、サン・ヴィクトルのフーゴー (Hugo de Sancto Victore) は比喩の意味に上昇の意味を含め、歴史の意味、比喩の意味、転義の意味の区別をしているとされる<sup>(17)</sup>。以上のように、特に聖トマスは字義の意味を尊重するのであるが、一般に著述の著者 (*auctor*) が目

指すのは字義の意味である。聖書の起動者 (auctor) は神であり、神はその認識知性において、全てを一挙に悟る。従って、聖アウグスティヌスが言うように、神の言葉としての聖書の一つの文字に複数の意味があっても不都合などないのである<sup>(18)</sup>。

聖トマスは、旧い律法 (vetus lex) のもろもろの事柄が、新しい律法 (nova lex) のもろもろの事柄を表示することによって比喩の意味が存在するとしている。即ち旧約聖書の旧い律法が、新約聖書の新しい律法の型 (figura・予型・前表) である場合、旧い律法は新しい律法を隠喩的に指示し表示する比喩の意味を獲得しているのである<sup>(19)</sup>。聖トマスは、聖パウロが「ヘブライ人への手紙」7章19節で、旧い律法が新しい律法の型であることを述べているとしている。そこでは、旧い贖罪祭儀に関する律法のもとでは完全には成し遂げられなかったことが、永遠の大祭司イエス・キリストにおける贖罪の業によって完全に為し遂げられた事が述べられているのである故、旧い律法とは旧約聖書における贖罪祭儀に関する律法、新しい律法とは新約聖書におけるイエス・キリストによって完全に成就した神の贖罪の業、上記の旧い律法からの人間の解放を述べていると理解できる。従って聖トマスによれば、新しい律法では、教会のかしらなるキリストにおいて為されたことどもは我々が為さねばならない (agere debemus) ことどもの諸々のしるし (signa) であり、キリストにおいて為されたことども、あるいはキリストを表示することどもにおいて為されたことどもが我々が為さねばならないことどもの諸々のしるしであることによって、道徳の意味が存在する。また聖トマスはディオニシウス (Dionysius) の『教会位階論』を引き合いに出しつつ、新しい律法そのものが将来の栄光を譬え指し示す型 (figura futurae gloriae) であるとしている。それは新しい律法、キリストにおいて為されたことども、キリストを表示することどもにおいて為されたことどもが、永遠の栄光におけることどもを表示することによって上昇の意味が存在するということである<sup>(20)</sup>。

例えば旧約聖書「イザヤ書」11章で述べられるエッサイの根からの若枝が、新約聖書における人類の復興者としてのイエス・キリストの処女マリアを通しての降誕 (受肉) を譬える型 (figura・予型) として隠喩のごとくに転用されたり、同じく旧約聖書「イザヤ書」53章で述べられる苦難の僕の姿が、新約聖書の「ルカによる福音書」23章で述べられるイエス・キリストの御受難や十字架での磔刑を譬える型 (figura・予型) として隠喩のごとくに転用されたりする際に比喩の意味が生まれるのである<sup>(21)</sup>。また我々人間の為すべきことや、終末論的な将来の永遠における栄光が、キリストにおいて為されたことどもに隠喩のごとくに転用され関係づけられて、より高まりより充実した意味を獲得することによって、道徳の意味や上昇の意味が生まれるのである。聖書の語や文言、物語における比喩の意味、道徳の意味、上昇の意味という三つの霊の意味は、自然を破壊せず却ってこれを完成する神の、イエス・キリストにおける救いの行為・出来事に根拠づけられ<sup>(22)</sup>、まさにその故にその各々の霊の意味は、字義的にその意味が不変のものとして確定されているのである。従ってまた、聖トマスと同じ立場に立つ限り、霊の意味から字義の意味への解釈学的安定はあり得ても、Dahanのように聖トマスの聖書釈義のうちに、字義の意味から霊の意味への解釈学的飛躍 (hermeneutical leap, saut herménéutique)<sup>(23)</sup> を探ろうとすることは的外れであると思われる。しかし聖トマスの立場での、以上のごとき解釈学的安定は、非教会的あるいは非キリスト教的立場で聖書と取り組む者には、解釈学的飛躍を促

し、聖トマスの立場では、この解釈学的飛躍を促す道が、非教会的あるいは非キリスト教的立場の者と共に歩まれることにもなる。この共なる歩みのうちに聖トマスの立場での聖書釈義は、解釈学的飛躍ではないが解釈学的深化や解釈学的拡張を経験することともなろう。聖書から明らかなように、全被造物、全人類はその究極的目的である神に向かい、神へと関係づけられ、聖トマスの聖書論は、このような全被造物、全人類の救いに関して、聖パウロと共に責任を自覚する<sup>(24)</sup> 聖書釈義を遂行していくことになると思われる。

## 註

- (1) ST.1,q.1,a.10.
- (2) ST.1,q.1,a.10,Respondeo.
- (3) Ibid.
- (4) Ibid.
- (5) Ibid.
- (6) Ibid.
- (7) Cf. ST.1,q.1,a.8,ad2.
- (8) ST.1,q.1,a.10,ad1.
- (9) ST.1,q.1,a.10,ad1.
- (10) Ibid.
- (11) ST.1,q.1,a.10,ad3.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid.
- (14) 新約聖書「マタイによる福音書」13章参照。Cf. Vulgata, Secundum Mattheum, p. 1544 sqq.
- (15) ST.1,q.1,a.10,ad1.
- (16) ST.1,q.1,a.10,Sed Contra. *Sacra Scriptura omnes scientias ipso locutionis suae more transcendit: quia uno eodemque sermone, dum narrat gestum, prodit mysterium.*
- (17) ST.1,q.1,a.10,ad2.
- (18) ST.1,q.1,a.10,Respondeo.
- (19) Ibid.
- (20) 以上, ST.1,q.1,a.10,Respondeo.
- (21) Cf. St. Thomas Aquinas, Expositio super Isaiam ad Litteram, in: S. Thomae Aquinatis opera omnia. 5, frommann holzboog 2003, 068CIS cp11 et 068CIS cp53.
- (22) 従って、聖トマスの聖書釈義において、「キリストが、聖書テキストに真理を与える型的（譬え的）原因（causa figuralis）である」とのGilbert Dahanの指摘は正しいであろう。Gilbert Dahan, Thomas Aquinas: Exegesis and Hermeneutics, in: SSTH, pp. 45-70. p. 70.
- (23) Ibid., p. 66. cf. Gilbert Dahan, Lire la Bible au Moyen Âge, Droz, 2009, p. 20. Dahanが言う「解釈学的飛躍」は、もともとは新約聖書の諸文書が書かれた際の旧訳聖書解釈において問題とされるべきことなのではないだろうか。
- (24) Cf, ST.1,q.9,Respondeo.

## Ⅲ. 聖書釈義としての五つの道の探究

聖トマスの『神学大全』第1巻第2問第3項の五つの道は、旧約聖書「出エジプト記」3章14節で述べられる啓示された神名Ego sum qui sumの拡大化された釈義的探究であるとも理解できる<sup>(1)</sup>。形而上学的神探究を包摂するにあたり、隠喩を用いた聖書における神表示の方途がたどられたのである。即ち、「さらに感覚可能なものを通じて理性的に理解可能なものに到達することは人間にとって本性的である。なぜなら、全ての我々の知得は

感覚からその始まりを所有するから」<sup>(2)</sup>と述べている聖トマスが、聖書からも読み取った神表示の方途をたどって、旧約聖書における神、従ってキリスト教教会の信仰者にとっては三位一体の神に他ならない神<sup>(3)</sup>が探究されたのである。感覚可能な被造的世界の現実の観察から到達された形而上学的な神の存在と本質を述べる言葉・語が、聖書の神に隠喩的に転用されたのである。即ち、五つの道で探究された、(1)「他のなにものによっても動かされない第一動者 (primum movens, quod a nullo movetur)」, (2)「第一動力原因 (causa efficiens prima)」, (3)「他のものらにのつての必然性の原因 (causa necessitatis aliis)」, (4)「万物にのつての存在と善性とあらゆる完全性の原因」, (5)「あらゆる天然的事物を目的に向かつて秩序付ける知性的存在者」は、Ego sum qui sum (Qui est) なる名の御者を表示する語として転用され、旧約聖書の神、したがってまた三位一体の神の唯一の存在・本質的属性を表示する隠喩として、聖トマスによって聖なる教えの内に定着せしめられたのであるとも考えられる。その転用の内に凝縮され、隠されていた内的理路が、五つの道として顕在化され、神の存在の所謂宇宙論的論証として解きほぐされ開示されたのである<sup>(4)</sup>。このように、聖書の釈義的探究への形而上学の導入と統合がなされたのであるが、それはまた聖書の事柄の探究の深化、あるいは神について語る聖書からのより深くより広い、読み出し・読み取り (Exegese・釈義) の一環であったのである。五つの道で提示された神の本質的属性を示すとも考えられる上記の五つの呼称の内、(1)と(2)は感覚で観察し検証することが可能な被造物の世界を直接に観察することによって探究されるものであり、(3)、(4)、(5)も被造的世界の感覚を通じての観察に触発されたり、認識を補われたり、牽引されたりすることによって探究されるものであると言えよう。人間の感覚によって確認しうる被造的世界から出発しつつ超感覚的な神の真理を表示する聖書の隠喩は、同様に感覚可能な被造的世界の観察を出発点としあるいはそれと連関しつつ超感覚的な次元の存在者である神の存在を目指す形而上学的神探究と、神論において相即し、この形而上学的神探究を自らに統合するのである<sup>(5)</sup>。

五つの道で形而上学的に探究された存在者の存在は、聖トマスのような教会の信仰者・神学者にとっては、聖書の神、従って又三位一体の神の存在であるから、信仰においてそれは全く自明で疑いえないものであると言える。それ故、五つの道における形而上学的神探究から聖書的神論・三位一体論に至るにあたって、教会の信仰者・神学者には解釈学的深化や解釈学的拡張はあっても、それを「解釈学的飛躍」<sup>(6)</sup>と呼ぶことは不適切であろう。しかし、聖トマスが正統的な教会的信仰へと導こうとしている、神の存在を否定する愚者や未信仰者、教会的信仰とは別様に神を信じている人々は、五つの道の終着点で、上記五つの呼称で示される存在者が、聖書の神、即ちEgo sum qui sum (Qui est) なる名の御者であることを前にして、それぞれの程度に応じた解釈学的飛躍を強いられ、飛躍する者もいれば飛躍しない者もいるであろう。「解釈学的飛躍」は、このように弁証的・宣教的意図が差し向けられる人々においてこそ本来的に問題となってくるものであろう。その際、啓示された神名Ego sum qui sum (Qui est) に固着する啓示神学から出発する五つの道での自然神学的神探究には、即ち信仰者による自然神学には解釈学的飛躍なるものは本来ありえず、五つの道での自然神学的神探究から出発して、啓示された神名Ego sum qui sum (Qui est) に向かう行程では、即ち未信仰者や非信仰者、非教会的立場の人々の自然神学



では様々な形で解釈学的飛躍が問題になってくるであろう。聖トマスの立場では、未信仰者や非信仰者、非教会的な立場の人々のこの解釈学的飛躍につきあうことになるが、未信仰者や非信仰者、非教会的な立場の人々の解釈学的飛躍によりそうことは、聖トマスの立場の信仰者にとっては解釈学的深化や解釈学的拡張を意味するであろう。五つの道の探究では、このような解釈学的深化や解釈学的拡張において、聖書釈義としての聖なる教え（キリスト教神学）に形而上学が統合され、包まれるのである。

聖トマスの聖なる教え（キリスト教神学）は、(A) 信仰者にとっての神学の行程である啓示神学から自然神学への歩み、あるいは自然神学を包摂する啓示神学と、(B) 自然神学（形而上学をはじめとする理性による学的探究）から出発し、解釈学的飛躍を経て啓示神学に至る道との間に、程度はさまざまであるにしても何らかの緊張を抱えていたことにもなる。この (A) と (B) との緊張のうちに信仰者にとっての祈りの場が形成され、教会的信仰の実定性は、自らを超越する超実定性・超実定的現実に向かって開かれそれを受け入れるのである。聖書がそのことを、教会的信仰に提示する。聖トマスの聖なる教えは、まさにそのような聖書と聖書を準備し受け止め釈義し解釈する教会の伝承に忠実なキリスト教神学の営みであったのである。

ハインリヒ・フリース（Heinrich Fries）の聖トマスに関する次の言葉は正鵠を射ていると言えよう。

「近代風に言えば、トマスは進歩派の人であった。即ち、新たに発見され、力強く広まりくるアリストテレス主義と取り組み、これを自らの神学の対話相手としたことによって、トマスは、新しいことをやり始めたのである。その際、アリストテレス主義は、人間の思考が到達しうるものの代表として、即ち、哲学・倫理学・政治学の領域における代表として対話相手であったのである。」<sup>(7)</sup>

この新しい取り組みは、聖トマスの時代の精神や思想に向き合い、それと対話し、取り組むこと、そしてまたそれと対決することでもあった<sup>(8)</sup>。聖トマスのこの新しい取り組みは、神の恩恵の超実定性 (Transpositivität) に開かれそれに対応するものであったので、新約聖書の時代以来、イスラエルから受け継ぎ、キリスト教教会に連綿と続いてきた伝統の内にある善きものを確認することにもなったのである。教会において神の言葉としての聖書が与えられているという、聖なる教え（キリスト教神学）の実定性 (Positivität) は、この実定性の外からの超越的な神の恩恵による被造的世界への介入と、この恩恵への信仰共同体の包摂という超実定性によって支えられ、この超実定性を証しているのである。この故に、聖書に基づき、伝承において聖書を尊重する教会の神学は、聖書を通して、既知なるイエス・キリストの神の未知なる新しい恩恵の業に常に開かれ、新しい時代の精神との出会いと交渉へと赴き、幾分か先取りされた永遠の将来を展望しつつ、その思索を深め進展させるのである。そこでなされているのは、聖書釈義とそれに関連する解釈学的深化と解釈学的拡張なのである。聖トマスの聖書釈義はその堅実な釈義法によって、聖書をして聖書を語らしめることを目指していたのであり、そのことによって、聖書から、聖トマスの時代の精神・思想と向き合い、対話し折衝する方向を読み取ろうとするものだったのである。聖トマスの聖書釈義は、イエス・キリストの神がいまだ未知である人々、あるいは神の子であり救い主としてのイエスがいまだ未知である人々に対しては、終末論的留保

の冷静さにおいて解釈学的飛躍を示唆し促すものであろう。このような超実定性と実定性、あるいは実定性と超実定性の相即・連関において神と向き合い、世界に開かれゆくキリストのからだなる教会は、祈りと愛の業の共同体ともなり、神学も本来はそこで涵養されるのが最も望ましいのであろう。聖トマスの、所謂スコラ学的総合は、彼の聖書釈義を根底に置き、それに支えられてなされたと考えられる。恩恵が自然（被造的世界の現実）を前提とする事に対応して、信仰は自然的認識知得（理性的被造物の本性的認識）を前提とするのである<sup>(9)</sup>が、それは恩恵が自然を自らの前提とする主体である事に対応して、信仰が自然的認識知得を自らの前提とする主体である事なのである。即ち、恩恵が自らの前提である自然の前提であり、これに対応して信仰が自らの前提である自然的認識知得の前提なのである。この故に、聖トマスの聖なる教えにおける所謂スコラ学的総合では、聖書釈義が自然的認識知得の勝義の前提であったと考えらるのである。

## 註

- (1) この五つの道については、拙稿「聖トマス・アキナス『神学大全』における五つの道」（『茨城キリスト教大学紀要』第49号所収，2015年）参照。Cf. Lluís Clavell, *Philosophy and Sacred Text: A Mutual Hermeneutical Help. The Case of Exodus 3, 14*, in: SSTH, pp. 457-480.
- (2) ST.1,q.1,a.9, Respondeo. Est autem naturale homini ut per sensibilia ad intelligibilia veniat: quia omnis nostra cognitio a sensu initium habet.
- (3) 拙稿「聖トマス・アキナス『神学大全』における神論・三位一体論」（『茨城キリスト教大学紀要』第47号所収，2013年）参照。
- (4) 前掲の拙著『聖アンセルムス神学の教義学的研究』第4章，前掲の拙稿「聖トマス・アキナス『神学大全』における五つの道」参照。
- (5) 以上，前註（4）で示した拙著，拙稿を参照。
- (6) Olivier-Thomas Venard, *Metaphor in Aquinas: Between Necessitas and Delectatio*, in: SSTH, pp. 199-228, p. 212. footnote 42.
- (7) Heinrich Fries, *Fundamentaltheologie*, 2. unveränderte Aufl., 1985, Verlag Styria, S.112.
- (8) Vgl. ebd.
- (9) ST.1,q.2,a.2,ad1.

## Der Grundgedanke von der Heiligen Schrift in der *Summa theologiae* des hl. Thomas von Aquin

Toru SASAKI

In seiner *Summa theologiae* hat der hl. Thomas von Aquin die Metapher in der Hl. Schrift als Gott (d.h. ihrem *auctor*) entsprechend verstanden, weil sie von Gott und seinem Werk redet. Der metaphorische und parabelhafte Sinnzusammenhang in der Hl. Schrift artikuliert sich als die vier Sinne, d.h. der geschichtliche oder literale Sinn, der allegorische Sinn, der tropologische oder moralische Sinn und der anagogische Sinn. Der erste, geschichtliche oder literale Sinn ist der Primaere und bezeichnet irgendeine Sache. Die drei anderen Sinne nennt der hl. Thomas die geistigen Sinne, mit denen in der Hl. Schrift die mit den Woertern bezeichneten Sachen selbst wiederum andere Sachen bezeichnen. Diese geistigen Sinne sind in den biblischen Wortzusammenhaengen und Ausdruecken woertlich (d.h. literal) versichert und unveraenderlich gemacht, so dass sie sich den primaeren Literalsinn voraussetzten. Deshalb kann auch das theologische Argument nur durch den Literalsinn geleitet werden. Die mit der metaphorischen Sprechweise zum Ausdruck gebrachten geistigen Sinne in der Hl. Schrift sind daraus entstanden, dass Gottes Heilstat entscheidend in Jesus Christus geschehen ist.

Mit dem sorgsam beruecksichtigten Literalsinne hat der hl. Thomas auf die stabire und zuverlaessige Exegese der Hl. Schrift gezielt, um die die Natur nicht zerbrechende, sondern vielmehr zur Vollendung bringende Gnade Gottes in Jesus Christus jeweils neu auszulegen. Fuer den hl. Thomas ist die Hl. Schrift die Basis seiner *sacra doctrina*, indem die katholische Kirche sie und die kirchliche Tradition (*Scriptura et Traditio*) in sich aufbewahrt. Seine als die metaphysischen Gottesbeweise mit der Beobachtung der empirischen geschoepflichen Welt gedachten fuenf Wege setzen sich die Exegese der Hl. Schrift voraus. Die mit der Metapher in der Hl. Schrift beschriebene Transzendenz kann dabei durch das metaphysische Argument noch einmal bestaetigt und argumentativ zur Sprache gebracht werden, indem die *sacra doctrina* des hl. Thomas sich in der Positivitaet der der Kirche gegebenen Hl. Schrift mit der in ihr gezeigten Transpositivitaet beschaefigt. Die Erforschung der fuenf Wege in der *Summa theologiae* des hl. Thomas soll fuer eine Erweiterung der Exegese der Hl. Schrift gehalten werden.